二十六聖人記念館（Ⅱ）

～長崎巡礼⑤～

長崎市西坂の殉教地に二十六聖人の記念碑・記念館を建てる機運は、一九四九年のサビエル来日四百年を機に高まった。そして一九六二年の「日本二十六聖人・列聖百年祭」に建てることが、長崎市とイエズス会との話し合いで決まった。

日本にキリスト教を伝えたサビエルはイエズス会員、一六一四年の徳川家康の禁教令までの日本でのキリスト教宣教の中心はイエズス会であった。

それから二百五十年間、キリスト教は禁止されたまま鎖国政策が続いた。一八五三年、黒船のペリー来航後、キリスト教宣教師が来日したのはイエズス会ではなく、パリ外国宣教会である。

一八六五年に長崎に建てられた大浦天主堂もパリ外国宣教会によって建てられた。

イエズス会が再来日したのは一九〇六年、教皇から日本にカトリックの大学を建てるよう要請されたためである。そして一九一〇年に上智大学が創立された。その後、六甲学院、栄光学園、広島学院と本州での学校教育に力を入れていたが、九州・長崎での二十六聖人記念事業の依頼を受けたのは、一九六〇年のことである。

記念館完成後の館長もイエズス会が担当し、初代館長はスペイン人で日本に帰化した結城了悟神父、二代目はアルゼンチン人のレンゾ神父である。

カトリック教会には男子、女子修道会が数多くあるが、最も大きいのはイエズス会。山口県はサビエルゆかりの地ということもあって、今日までイエズス会が司牧している。

山口県で洗礼を受けた私が知っている外国人宣教師のほとんどはイエズス会の神父。長崎の二十六聖人記念館もイエズス会の神父が館長ということもあり、これまでに五回訪れた。

今回、記念館がリニューアルされて初めて訪れたが、一つだけ残念なことがあった。それは、以前はあった館の入り口の言葉がなくなっていたことである。

「人間は旅人である。旅をしながら、歴史をつくるが、その旅路は人間を育て精神的に豊かにする。

すべての旅のうちで最もすぐれたもの、それは神への人の心の旅である」

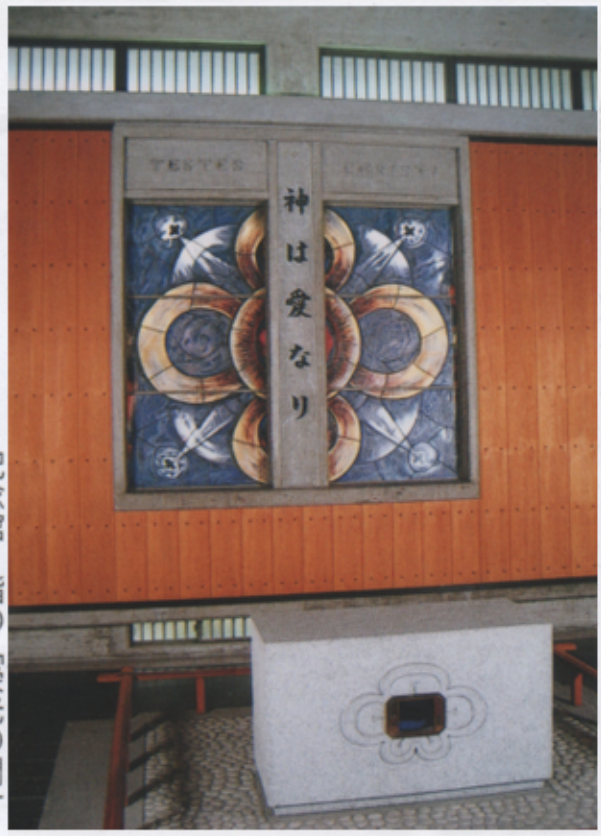
この言葉こそが記念館のテーマと思うからである。二十六人の過酷な殉教への旅、記念館二階には二十六人の遺骨が安置されている「栄光の間」がある。復活を意味するのだろう。

殉教は理解できても自分には無理だという気持ちが強い。しかしここを訪れるたびに「生きた証」である殉教の歴史は、自分と無関係なものではないと言われているように思えるのだ。

◇　◇

「殉教者の血は奉教人の種（たね）」

（殉教者の伝記に出てくる言葉）



記念館2階の「栄光の間」

巡礼者サビエル像（ドイツ製で木彫）

二十六聖人の一人、イエズス会の「パウロ・三木」